

怪我の功名

「ワタナベさあん、ワタナベさあん、ここどこかわかりますか？」

半睡状態の私には何が何だか分からない。白衣の医師の問いかけである。病院であることは確からしい。でもなぜ私がここにいるのか判然としない。

ここに運び込まれた次第を聞かされるうちに段々と分かってきた。この半月ほど、夏の疲れがどつと出ていた。それから逃れたくて毎夜、結構な量の酒を飲んだ。ある日の深更、飲みすぎてリビングルームの床の上に倒れ込んで熟睡してしまった。朝目覚めたら躰の自由を失っていた。携帯電話ににじり寄り近所に住まう娘に電話をかけた。直ちに救急車に乗せられ、生まれて初めてピーポーピーポーのご厄介になった。

近在の荏原病院に着くや、冒頭の事情に至った。診断の結果、脳出血だと告げられた。対応がはやかったおかげで比較的短期間のリハビリではほぼ普通の生活に戻るらしい。

そうはいっても、このリハビリ始めてみるとやた

渡辺利夫 (公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任(二〇一〇年十二月、退任)。二〇一七年六月より現職。

らに忙しい。合間をぬってこの文章を書いている。

入院してみても気づいたこともある。月刊総合誌二誌、新聞一紙に月一回のコラムを書いている。自分でいうのもなんだが、これがまあまああの好評を得ている。もう一年やってくれ、もう一本の論説の執筆をやってくれとの依頼もある。これもやろうかと考えていたのだが、もう八十四歳である。前に進むより、過去の著作を整理して著作集を仕立ててはどうかというある出版社の申し越しを受けて、この仕事に残りの人生を費やしてみよう、と考えるに至った。

八十を超える生涯の中で積み上げてきた研究業績の中にひよつとして今まで気づくことのなかった何かがあるのではないか。過去に向かうセンチメンタルジャーニーが、今後の私の思索の旅になりそうだ。少数ではあるうが私の論説に共感を持っていただいている読者諸兄にはぜひ見守っていたきたい。自分の生涯の仕事は未来の中にあるのではなく過去の中にある、とこの病の中でつくづくと考えさせられている。